

令和5年度(2023年度)

「19世紀プロイセンにおけるラントヴェーア編成と市民社会」

関西大学大学院文学研究科 博士課程後期課程

高岡佐登美

## 要約

本論文は、19世紀初頭にプロイセンにおいて一般兵役義務制の成立と解釈された「市民軍」ラントヴェーアの実態解明を通じて、正規軍とは異なる新たな軍制、軍事組織であったラントヴェーアとプロイセンの市民社会との関係の一端を明らかにすることを目指した。

19世紀後半のドイツ帝国成立の立役者となったプロイセンの軍隊は、原則、国民の平等な参加にもとづき、兵役免除を認めない、一般兵役義務制と呼ばれる厳格な軍制にもとづいていた。プロイセンにおいてこの制度は、1813年の解放戦争時のラントヴェーアの設立とともに成立したと考えられている。またラントヴェーアは中央政府の統制のもとにおかれた正規軍とは異なり、都市、郡により編成された民兵的な色彩を帯びた軍隊であった。ラントヴェーアの兵数は19世紀のプロイセンにおいて、おおよそ正規軍のそれを超えていた。規模の大きさにくわえ、その民兵的性格からして、ラントヴェーアは社会と広汎な接合部分をもつ存在であった。この点、軍隊と社会の関係性に焦点を当てる「軍隊の社会史」にとり意義深い研究対象であるものの、従来、「市民軍」として市民と貴族、自由主義と保守主義の対立の象徴とされたにもかかわらず、正規軍ほどには注目を集めてこなかった。さらに史料の散逸により、地域レベルでの研究も必ずしも充実しているとは言えない。

本論文の第一章では史料として、ドイツ語圏で発行された影響力の大きな事典類を用い、18世紀後半から19世紀までの時期ごとに主流となったラントヴェーアの基本的性質や歴史的理解を追った。その結果、18世紀、19世紀を通じてラントヴェーアを「市民軍」と記述したのは、19世紀前半の自由主義的な論調を持つ『国家事典』のみだった。さらにラントヴェーアは、19世紀前半にはロシアや複数のドイツ諸邦で設立された軍事組織によくつけられた名前であり、各領邦が独自のラントヴェーアを保有していた。当初、プロイセンのラントヴェーアはそのひとつにすぎず、19世紀なかばにやっとプロイセンのラントヴェーアが着目され、統一戦争に先駆けて高く評価されるようになったにすぎなかった。

第二章では、プロイセンのラントヴェーア編成の実態を解明する前提として、都市ベルリンの「愛国心」の醸成とその意味の変遷を地方紙から分析した。制度上、ラントヴェーアはすべての男性住民に兵役義務を課しており、広範な住民の協力を必要としたからである。その結果、地方紙ではあまり取り上げられない単語ながら多様性を内包していた「愛国心」は解放戦争期に地方紙に溢れ、それを示す行為は戦争協力の要請に一本化された。

第三章ではベルリンの兵卒として召集された都市市民のラントヴェーア編成の実態を、

従来議論の俎上に載せられてこなかった地域の史料、具体的にはベルリンのラントヴェーア編成委員会と市議会の議事録から解明しようと試みた。二章で指摘したとおり、地方紙の記事は「愛国心」溢れる住民がマジョリティーであるように書かれている。その一方で編成委員会や市議会の議事録によれば、ベルリンの住民の大半が志願ではなく抽選を選択しており、その兵役忌避の最大の理由となったのは「愛国心」の有無ではなく経済的な問題であった。ベルリンの市議会は慣習通り、兵役免除にあたって住民に、「自発的な寄付」、「愛国的寄付」の支払いを求めた。またラントヴェーアの召集を統括した軍管区司令部も、住民を動員するのが困難であるというベルリンの状況に理解を示し、プロイセン領外のドイツ人の雇用を市議会に斡旋した。都市ベルリンの事例は、解放戦争期のラントヴェーア編成全体でこうした地域の状況、つまり地域性と、それに対応するための譲歩という多様性が内包された可能性を強く示唆したのである。

経済的な理由から兵役を忌避した都市市民に対し、第四章では志願してベルリンのラントヴェーアの市民将校として従軍した、教養市民アイヒホルンとその周囲の教養市民層に焦点をあてた。アイヒホルンは愛国的、プロイセン諸改革に親和的な一派との交友関係、親族関係を背景に、教授でありながらラントヴェーアに将校として従軍した。また彼とその周りの教養市民層はラントヴェーアを「私たちの軍隊」というほど愛着を持った。この観点ではアイヒホルンのような教養市民層にとって皆で協力して作り上げたラントヴェーアは、「市民軍」だった。しかしながら、アイヒホルンは経済的な観点から解放戦争後、ラントヴェーアを退役し、それ以降ラントヴェーアに参加しなかった。その一方で彼らは25年後までベルリンでラントヴェーアの追憶の会を開き、変わらず愛国的、プロイセン諸改革に親和的だった一派を中心とし、当時のラントヴェーアを支持した。しかしながら追憶の会の参加者の多くは、アイヒホルンのようなラントヴェーアの退役軍人と正規軍将校であり、当時のラントヴェーア将校とはほとんど接点を持たなかった。

本論文において従来見落とされてきた地域の史料にもとづき明らかにしたのは、ラントヴェーアの編成が、原則、国民の平等な参加にもとづき、兵役免除を認めない、一般兵役義務制と呼ばれるプロイセンの厳格な軍制の成立ではない、ということである。ラントヴェーアは少なくともベルリンにおいては広範な都市の住民に支持された「市民軍」ではなく、あらゆる点で地域性と多様性を兼ね備えた軍隊であった。その一方で、本論文で扱った事例は、主に解放戦争期であり、空間的にも都市ベルリンのみと極めて狭い範囲に留まっている。今後、他の都市、郡への史料調査を継続しつつ、断片をつなぎ合わせ、将来的にラントヴェーアの地域性と多様性を相対化し、把握することを試みたい。こうした多くの課題は残ったが、本論文では、都市ベルリンにおける解放戦争期のラントヴェーアの編成に関する地域性と多様性を明らかにし、ラントヴェーアの、そして軍隊とプロイセン市民社会の関係性の一端を理解するに有効的な事例を提供できただろう。